

# 超高齢社会における世代間交流のあり方

—長野市鬼無里地域での実践を通して—

田中慶子 松本市立中山小学校

角間陽子 福島大学

角尾 晋 東北大学

草野篤子 生活科学教育講座

キーワード：超高齢社会，世代間交流，幼老複合施設，役割意識，学校教育

## 1 はじめに

日本社会における人口高齢化の特徴は、他の先進諸国と比べても急速に進んでいることにある。総務省統計局による平成18年4月の推計<sup>1)</sup>では65歳以上の高齢者が2,606万人、高齢化率は20.4%で、総人口のほぼ5人に1人の割合となっている。高齢者が急増する一方、子どもの数は1,765万人で総人口の13.7%であり、減少の一途をたどっている。

人口構成の急激な変化は全ての世代に幅広く影響を及ぼすものであるが、特に子どもや青年といった若年世代には、一般的な意味での次世代社会の担い手だけではなく、超高齢社会の担い手としての役割が付与されることとなる。現在の若年世代の加齢や高齢者に対する認識や態度は、超高齢社会の将来のあり方を方向付けるものであるが、異世代間の交流が著しく減少した家庭や学校、地域社会では、日常生活において、意識的・意図的な配慮なしでは多様な人間関係を構築する機会を得ることが極めて困難な状況になっている。

子どもからみた身近な異世代としての祖父母の存在があげられるが、総務庁の「児童・生徒の高齢化問題に関する意識調査結果」<sup>2)</sup>では、祖父母と「毎日のように会う」子と「たまに会う」子が両極に分かれており、子どもの年齢が高くなると接触頻度が低下すること、接触頻度には居住形態の影響が大きく、特に「遠方で別居」の場合には顕著に少ないこと、交流の内容としては同居の場合で「家での夕食」、「テレビ」、「挨拶」、「学校等の話」といった生活習慣的なものが多く、別居の場合は「会いに行く」、「電話をする」、「お手伝いをする」が上位を占めており、小学生・中学生ともに同様の傾向が明らかになっている。

中野ら<sup>3)</sup>は小学生の高齢者に対するイメージに影響を与える主要因は「老人との過去の経験」であり、幼い時の経験が極めて重要であると述べている。また年齢が上がるに従い否定的な老人観をもつようになるが、中学生の老人観にも高齢者との交流や経験が強く影響しており、単に同居か別居かという形態よりその中でどのような交流や経験をしているかが重要であると、馬場ら<sup>4)</sup>は報告している。

一方、児童虐待や高齢者虐待を別々の問題として対応するのではなく「成人期の役割と深く関係する<子ども・高齢者>問題として捉え、その視点から問題と課題を見直して見る必要がある」と指摘した増山<sup>5)</sup>は、<子ども・高齢者>関係の本質と歪みについて次のように述べている。

- ・今日の<子ども・高齢者>問題の歪みの背景には、「子ども」と「高齢者」がともに社会の中で正当な位置を占めていない、社会参加が保障されていないという問題がある。
- ・年寄り世代が生きてきた時代に身に染み込ませている価値観や生活姿勢（勤勉・節約など）と、大量消費・洪水のような情報化の中で生きる孫の価値観や生活態度とのギャップ。年寄りの経験

や知恵を示す共同作業や労働や伝承文化の衰弱と喪失。年寄りと子どもを繋ぐ世代としての親たちの忙しさと子育て観・家族観の曖昧さなどの中で、同じ屋根の下に年寄りと孫が同居していても、自動的に年寄りを尊敬する心が育ち、知恵や経験を学び取る時代ではなくなっている。

- ・ 主に都市部を中心に発生した事件には、親による子育ての問題、親子関係の問題だけでなく、いずれも子どもの成長過程における子どもと祖父母とのかかわりの問題、父母と祖父母と人間関係の問題が重要な要因となっている。時にその関係は、母親以上に子育てにかかわる祖母の歪んだ「期待」「愛情」への殺意として、あるいは、「教育」熱心な父母から逃れうる癒しの存在としての祖父母の死が、少年の変化のきっかけになったというようにその現れ方は異なるけれども、「子どもの事件」のルポルタージュには必ず<子ども・高齢者>問題が顔を覗かせている。
- ・ 子どもと年寄りの問題に起こりうる矛盾や葛藤に両親自身が無頓着でいると、いつでも事件となって噴出しうる問題が、いま日本社会の奥底にマグマのように存在していることに、リアルに目を向けておかなければならない。

異世代間の分離と囲い込みが進んだ現在、祖父母との交流が子どもにとって高齢者世代と接する機会であることは否定できない。また物理的に距離が近いこと、すなわち同居や近居で接触頻度が多くなるとともに、頻繁に会うことができれば心理的な距離も近くなっていく可能性は高い。しかし、問われなければならないのは“交流の質”であり、そのために世代間交流が意識的かつ意図的にプログラムされなければならないことは自明である。では“交流の質”とは一体何であろうか。世代間交流ならびに理解を促進する様々な試みの影響を概念的に説明し、分類し、評価できるとして「世代間関与の深さ」尺度を提唱した Kaplan<sup>6)</sup>は、7段階の交流度レベルを設定し、他の世代に対する意識の変容や血縁関係がない者同士の親しい関係の育成、コミュニティ意識の構築や self esteem の向上を目的とする場合には4以上のレベル、すなわち一年に一度、もしくは定期的な交流活動から継続的かつ自然な世代間交流・支援とコミュニケーションが必要であると述べている。したがって交流度レベルが高いほど世代間関与は深くなるとされるのである。

しかし、交流の度合いはそのまま“交流の質”と同義に捉えられるものなのであろうか。例えば他の世代に対する意識を変えることが子どもにとってどのような意味をもつのかについてはプログラム参加前後の変容状況の評価規準や方法も含め、さらに検討しなければならないが、詳しくは後に論ずる。いずれにせよ三世同居の推進や異世代と接する機会を設定すれば交流が発生し効果が得られるという主張は安易であろう。

広井<sup>7)</sup>は、人間という生物の本質的な特徴を「世代間」相互のコミュニケーションの強さ、あるいはその「関係」性にあり、「高齢者ケア」を子どもを含めた3世代モデルという全体構造のなかでとらえるべきとして、複数世代を含んだコミュニティ・ケア、特に「老人と子ども」のケアの統合が特に重要な柱となると述べている。この「幼老統合ケア」は少子高齢社会の直接的なニーズ、すなわち子育て支援や介護に加えて施設の設備費用といった財政的な面からも関心が高まり、子ども関連施設と高齢者の介護関連施設が合築（併設）された「幼老複合施設」が各地で見られるようになってきた。平成15年の「社会福祉施設等調査結果の概況」<sup>8)</sup>における併設の状況をみると、保育所との併設がある老人福祉施設は519ヶ所、介護老人保健施設は46ヶ所で増加傾向にある。しかし、必ずしも全ての幼老複合施設で世代間交流活動が実施されているわけではない。また、子どもが利用する施設と高齢者福祉施設とが併設・合築されるようになってそれほど時間が経過していないことから、世代間交流が実施されていたとしても、ある程度の年数を継続して行われているという活動は多くはない。長野県の旧上水内郡鬼無里村（現長野市鬼無里地域）における幼老複合施設での世代間交流活動は、

参与観察の時点までに9年が経過している。また、鬼無里地域の子どものほとんどは鬼無里保育園を経て鬼無里小学校・鬼無里中学校へと通う。そのため子どもたちは年長児から15歳までの約10年間、地域の高齢者と交流することになるのである。

平成18年6月に出版された幼老統合ケア研究会による専門書<sup>9)</sup>は、13の先進事例の多様な取り組みと効果が詳細に紹介されているばかりではなく、幼老統合ケアを実践するためのポイントを入門編、実践編、安全対策や発展編に分類してまとめている。また、幼老統合ケアを行っている全国23ヶ所の施設が資料編に記載されており有益な示唆に富んでいるが、複合施設から小学校、そして中学校のように学校段階を越えて継続している事例はない。鬼無里地域における当時の村レベルでの世代間交流活動は全国に先駆けた取り組みであり、学校教育における世代間交流活動のあり方を検討するためには最適である。本報の保育園児、小学生、中学生はそれぞれ別の子どもたちの集団であり、同一集団を時系列に調査した縦断的研究ではないが、こういった地域性からみて、追跡調査的な意味を内包していると捉えることができる。したがって、幼少期の世代間交流の経験が学齢期の子ども達にどのような影響を及ぼすのかも検討することができる。

学校教育の場でも、平成8年7月に中央教育審議会が「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(第一次答申)として今後における教育の在り方の基本的な方向を次のように述べている。

- (a) 学校・家庭・地域社会の連携と家庭や地域社会における教育の充実
- (b) 子供たちの生活体験・自然体験等の機会の増加
- (c) 生きる力の育成を重視した学校教育の役割
- (d) 子供と社会全体の「ゆとり」の確保

この「生きる力」とは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であり、たくましく生きるための健康や体力が不可欠であるとしている。これを受けて平成9年6月の第二次答申の「第5章 高齢社会に対応する教育の在り方」では、「これからの高齢社会を生きる子どもたちの教育は、極めて重要な課題である」として「第一に、子どもたちが高齢者だけでなく、社会的な弱者や外国人などを含めて、自分自身と立場や考えなどが異なる人間と、共に生きていくという考え方をしっかり持つこと」、「第二に、子どもたちが、長寿化する社会の中で、長い人生を自立して生きていくということを考えると、生涯にわたって学んでいく態度や心身ともに健康な生活を送るための基礎的な健康や体力をはぐくむこと」、「第三に、長年培ってきた豊かな経験と知識を有する元気な高齢者が、子どもたちの教育という営みに積極的に参加していくことは、子どもたちが高齢者から様々な生きた知識や人間の生き方を学んでいくことを可能とするものであり、今後ますます重要になるということ」という基本的な考え方を示している。

さらに子ども数の減少によって生じた余裕教室の活用が図られ、学校の施設開放や地域や保護者のパートナーシップとしての関係づくりや学校参加、さらには「総合的な学習の時間」の創設もあって、放課後や休日、課外活動ばかりではなく、教科の学習を支援する「学校支援ボランティア」が推進されてきた。これまでも児童・生徒によるボランティアや介護体験、学校行事への招待等の世代間交流活動が実施されてきたが、地域の多世代がより積極的に学校へと関与することが求められるようになってきている。

また平成12年に中央教育審議会は、初の試みとして委員の発意による議論の報告を「少子化と教育について」にまとめ、特に「子どもは社会の宝」であり、「社会全体で子どもを育てていく」こと

が大切であるという考え方を強調している。

21世紀の福祉社会においては、これまでの細分化された分野や組織を横断的に結びつけていくことがより一層求められることになる。家庭、学校、職場、地域社会といった生活の場そのものばかりでなく、それを動かしているシステムや人間関係も同様である。性別や年齢、所属等に役割が限定されない、全ての人の参画が可能な社会を構築するための一助として、世代間交流が注目されている。特に今後の超高齢社会を生きる子どもたちにとって、同年齢集団の縮小に対する代替としてではなく、身近な生活を見つめ、将来を展望し、人生や生きることを意味を“自分自身の課題”として考え、学ぶことができる機会やそのための手段としての意義をもつことを重視すべきである。

これまでに筆者（山崎、角間、草野）ら<sup>10)</sup>は子どもと高齢者との交流を祖父母と孫が同居することのみに期待するのは非現実的であり、異世代との交流は、家庭内や親族間の結びつきから地域社会へのつながりへと発展させる必要性を主張してきた。

そこで本研究では、児童・生徒にとって価値ある体験となる学校教育における世代間交流のあり方の検討を目的として、長野市鬼無里地域（旧上水内郡鬼無里村）の交流活動への参与観察を行い、児童・生徒の高齢者に対する認識や交流への意識等にどのような影響があるのかを明らかにするための質問紙調査を実施した。



写真1 鬼無里村福祉総合施設の外観

出典：長野県鬼無里村福祉総合施設リーフレット

## 2 鬼無里地域における世代間交流の実践

長野県上水内郡鬼無里村は、平成17年1月1日付で長野市に編入合併された。市の中心部から北西約20kmに位置する、周囲を山々に囲まれた盆地で山林面積が8割を超えている。全国平均に比して高齢化が先行し続けており、平成9年には33.9%であった高齢化率は、僅か5年後の平成14年には40.3%まで達している。

旧鬼無里村には平成3～4年度に、高齢者生活福祉センター「やすらぎ」と鬼無里保育園を併設した複合施設が建設された。また、平成7～8年度には隣接して障害者等共同作業所「でづくな」を建設、平成13年には「やすらぎ」とコミュニティセンターを備えた老人福祉センター「ふれあいセンター」（昭和62年度に建設された）との間にエレベーターを新設し、デイサービス・ショートステイ等の両施設を使った事業が、より機能的に行われるようになった。

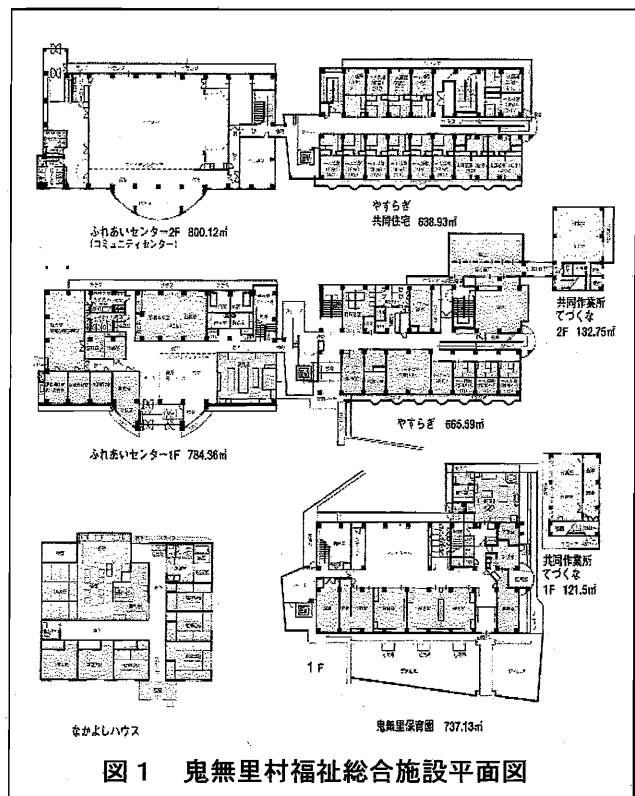


図1 鬼無里村福祉総合施設平面図

出典：長野県鬼無里村福祉総合施設リーフレット

同年には旧両京保育所を改築したグループホーム「なかよしハウス」が設立された<sup>11)</sup>。ハード面での環境整備が進む中で、高齢者には村の子ども達を覚えてもらい、子ども達には交流を通してお年寄りの優しさや知恵を学んでもらえればと、福祉総合施設における世代間交流活動が平成6年に開始された。

(1) 鬼無里保育園の交流活動

鬼無里保育園では、主に年長児が毎日30分間の交流活動を行っている。交流会は毎回、一人一人の園児が自分の住む地区名を入れた自己紹介をすることから始まる。交流内容はその週の予定等によって異なるが、挨拶だけに行くという日もある。それでも園児は毎日、何らかのかたちで高齢者との交流の機会を有している。交流活動の相手は「生きがい型ふれあいデイサービス」を利用する6つの班の高齢者と「やすらぎ」デイサービス利用者であり、したがって園児は合計で7回、ほぼ同じ内容の交流活動を行うことになる。交流活動は、保育園とふれあいセンターの職員による月に1回の打ち合わせで決定される。園児と高齢者にとって無理のないよう、各々の予定を確認しながら計画がなされている。併せて、月ごとに季節を考慮した行事等が組み込まれている。

<第1回実地調査：2003年9月16日（火）>

園児は参加者が揃うのを待つ間、既に来ていた高齢者と主に野球等の世間話を交わしていた。全員が集まると保育士が参加人数や園児の健康報告を行い、敬老の日のお祝いとして園児が作ったコスモスの花の首飾りを、園児代表が高齢者一人ひとりに手渡した。園児の自己紹介の後には高齢者の間に園児が入り、手遊びや音楽に合わせて移動しながら肩たたきをした。高齢者は園児の顔を必ず見てお礼を言い、活動中には自然な会話が親しく交わされ、双方がとても楽しそうであった。

表1 鬼無里保育園の日常の交流活動

活動主体	保育園の年長児
交流時間	毎日30分間（14時30分～15時／お昼寝とおやつの間）
交流相手	生きがい型ふれあいデイサービス利用者1班～6班 および「やすらぎ」デイサービス利用者 ※園児は7回ほぼ同内容の交流活動を行っている。
活動計画	保育園とふれあいセンターの職員による、 月1回の打ち合わせで決定される。 ※それぞれのスケジュールを確認しながら、季節に合わせた、 園児や高齢者に無理のないよう計画される。
交流内容	①居住地区名を入れた自己紹介 ②その日の交流活動 ※挨拶だけ、プールに入る前にお水を被覆しに行く等 ③握手

表2 鬼無里保育園の月行事での交流活動

月	交流内容
4月	公園までの散歩
5月	風船バレー
6月	七夕まつり制作
7月	七夕まつり
8月	あいさつ交流
9月	ミニ運動会・敬老の日のプレゼント
10月	ミニ運動会
11月	お店屋さんごっこ
12月	クリスマス会
1月	かるた・すごろくゲーム
2月	おひなまつり
3月	おひな祭り会



写真2 参加者が集まるまでの様子



写真3 コスモスの首飾りをプレゼント



写真4 歌いながらの肩たたき

### ＜第2回実地調査：2003年9月29日（月）＞

運動会前のため、園児は練習している体操を披露していた。元気に踊る園児の姿を見ながら自然と一緒に手を合わせて踊る高齢者もいた。

### ＜第3回実地調査：2003年10月16日（木）＞

当日は午前中より保育園行事の焼き芋大会で、年長児に加えて年中児や年少児、3歳未満児を含む全園児が交流活動に参加した。交流会の内容は日常的に行われている自己紹介から始まったが、高齢者との交流に慣れている年長児が緊張してい

る年中児を励ます姿も見られた。焼き芋にちなんだ

手遊びの後で、年長児は「焼き芋屋さん」となって参加者に焼き芋を配り、皆に行き渡ったかを一生懸命確認していた。

#### (2) 鬼無里小学校の交流活動

学年ごと、あるいは異学年の縦割り編成グループで年に数回の交流活動を行っているが、保育園では毎日実施されていたことを鑑みると、交流回数は激減することになる。小学校では活動主体ごとに交流内容は異なるが、今回は5年生の活動に参加することができた。5年生は年に2～3回「やすらぎ」を訪問して、歌や太鼓の演奏やゲーム等による交流活動を実施している。活動の計画は児童が立案し、「やすらぎ」の職員に相談して決定する。交流会も児童が中心となって進行されていた。

2003年10月の第1回訪問の活動内容は、歌や大きなサイズのオリジナルカードを使ったカード合わせゲーム、風船バレーであった。第2回の2003年11月には6年生と共に訪問し、学年ごとの太鼓の演奏の後、5・6年で合同発表を行った。その他に手作りメッセージカードのプレゼント、肩たたき、風船バレーという活動内容であった。2003年12月には第3回の訪問が実施され、クリスマス・イヴにちなんで男子生徒がサンタクロースに扮し、メッセージカード付のお菓子をプレゼントしていた。歌や玉入れゲームも行われていた。

Sさんの学習カードと2回目の訪問後に書かれた作文から、第1回では漠然としていた「自分のめあて」や高齢者に対する接し方への反省が、第2回には「高齢者に楽しんでもらえるように協力したい」のように明確かつ具体的に変化したことが読み取れる。また、前回の課題を踏まえて交流活動に参加した結果、自分なりに頑張ることができたことが喜びをもって述べられている。さらに、自分よりも自然にコミュニケーションをとっている友達や職員が高齢者に接する様子から学び、自分に何ができるのか、どのような自分になりたいのかといった、「自分自信を向上させる」という世代間交流の効果が高められていた。

#### (3) 鬼無里中学校の交流活動

各学年や生徒会の活動などで一人暮らしの高齢者宅への訪問や高齢者と一緒に様々な作業を行う等の活動が行われている。2年生では1年次の秋から月に1回程度、グループホーム「なかよしハウス」を訪問している。交流活動が体験のみにとどまらないよう、活動



写真5 体操の披露

表3 鬼無里小学校の交流活動

活動主体	学年ごと/縦割りグループごと
交流回数	年に数回
交流相手	「やすらぎ」利用者/老人大学受講生
活動計画	児童が原案を作成し、「やすらぎ」の職員に相談する。
交流内容	児童の司会進行による歌や太鼓の演奏、ゲーム等 ※交流後は写真を貼った手紙を各自が書いて送る。

学習カード「やすらぎ訪問メモリー」

- ①自分のめあて
- ②訪問を振り返って  
楽しかったこと・良かったこと/反省・次回に生かしたいこと
- ③「やすらぎ」で見つけたさわるやささん  
友達の様子から

表4 鬼無里中学校の交流活動

活動主体	学年ごと/生徒会活動
交流方法	一人暮らしの高齢者宅への訪問 高齢者と共同で作業等
交流回数	2年生は月1回程度
交流相手	グループホームの利用者
交流内容	現在は事前に計画していない

の振り返り等の事後学習には十分配慮しているとのことであった。一方で、当初は交流の内容をある程度計画していたが、現在ではその必要がなくなったために事前の交流内容計画は作成されていない。生徒は職員の様子を観察し、高齢者への接し方などをそれぞれが学んでいるようである。また「なかよしハウス」の利用者と2年生が同人数のため、高齢者と中学生は毎回、1対1の交流ができています。

### 3 鬼無里地域における小・中学生と隣接地域の児童に対する質問紙調査

#### (1) 調査の概要

鬼無里小学校2年生～6年生66名、鬼無里中学校1年生～3年生31名を調査対象として質問紙調査を実施した。主な調査内容は、最も身近な高齢者の存在と、接する機会および交流内容、SD法による高齢者に対するイメージ、高齢者との交流に対する意識等である。また比較対照群として、県内のN小学校2年生～6年生83名にも同内容の調査を依頼した。上記の学校調査実施時期は2003年10月、回収率は100%であった。

調査対象を小学校2年生からとした理由は、鬼無里小学校1年生において有効な回答が得られず、本調査に対する言語的な認識・判断が困難であることを考慮した。また、小学校の特に低学年では「高齢者」がわかりにくいこと、「おじいさん、おばあさん」では自分の祖父母に限定される可能性が高いため、調査用紙では高齢者を「お年寄り」と表記した。

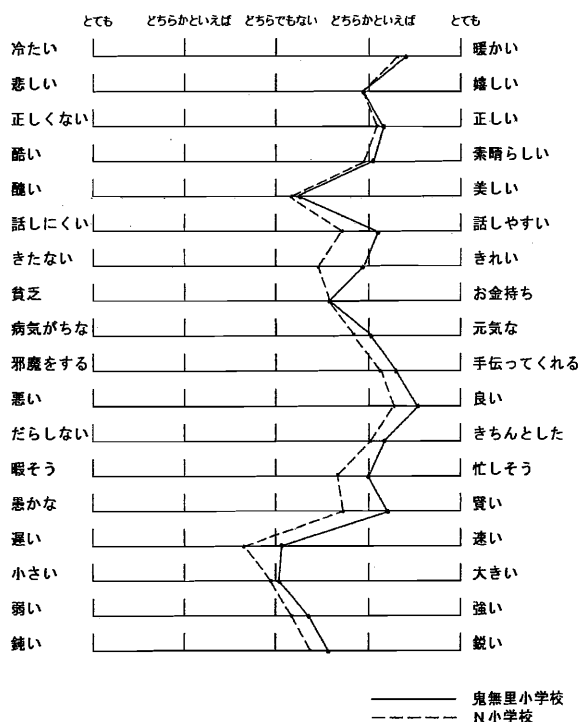


図3 小学校別にみた高齢者イメージ (SD法による平均値プロフィール)

#### (2) 結果

18あるSD項目を5段階で得点化し、各項目の平均値をプロットしたものが図3である。鬼無里小学校では全ての項目で、N小学校では16項目が中立点より右側に寄っていることから、いずれの小学校も全体的に高齢者に対するイメージは良く、各項目の平均値を比較しても大半の項目で顕著な差はない。しかし一方で、「話しやすい」「きれいな」「賢い」「早い」の4項目では差異が認められ、鬼無里小学校の方がN小学校よりポジティブに捉えていることも明らかとなった。高齢者に対するイメージへの影響要因を検討し、相関が認められたものを表5にまとめた。

さらに、負の相関があった「学校」

および「学年」別の高齢者イメージを図4に示した。全ての学校と学年で、肯定的イメージが否定的イメージを大きく上回る結果となり、鬼無里小学校では学年が進行するに伴って「やや否定的」な高齢者イメージが増加しているものの、「肯定的」グループの割合は高学年でもN小学校より高い。

また中学校段階では他地域と比較していないため、鬼無里中学校が特に低いとは言い難い。図5の学校別にみた高齢者との交流に対する意識からも「とてもしたい」と回答した割合は、鬼無里中学校

表5 高齢者イメージに影響する要因

	F値	自由度	相関係数
学校	6.300	2	-.269**
学年	6.139	2	-.264*
積極的な交流	3.147	2	.188*

\*p<.05, \*\*p<.001

が29.0%で、N小学校の21.7%より高くなっている。  
 高齢者イメージが「やや否定的」である場合には18.3%であった交流への積極的な回答が、「やや肯定的」では26.3%に、「肯定的」では53.3%であることから、肯定的な高齢者イメージは交流に対する意識を高めることが明らかとなった (p<0.001)。しかし、「やや否定的」な高齢者イメージのグループであっても、高齢者との交流について「とてほしい」と「できるだけほしい」を合わせた割合は84.7%で、高い値を示していた (図6)。

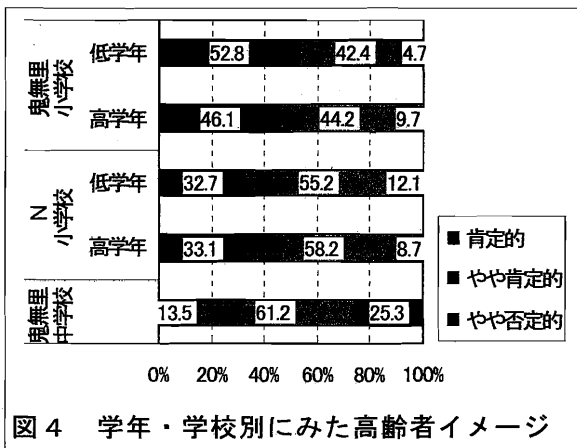


図4 学年・学校別にみた高齢者イメージ

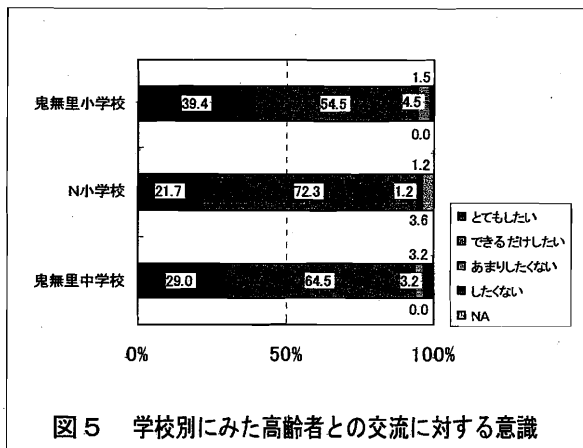


図5 学校別にみた高齢者との交流に対する意識

4 まとめ

長野市鬼無里地域の保育園，小学校，中学校において実践されている世代間交流活動へ参与観察した結果，以下の点が見出された。

- ① 園児は“お年寄りのために自分たちにできること”という交流に対する役割意識をもち，主に年長児が活動を行っていることから“交流は年長さんの大切なお仕事”と交流の役割を担うことに対する喜びや誇りを感じていた。
- ② 小学生は，自分たちにできることをもっと担いたいと自主的に交流活動を計画し実践していた。
- ③ 中学生になると交流活動は福祉への関心を高める契機となり，“今，自分たちにできること”という発想から，高齢社会が抱える様々な問題へと目が向いてきているようである。

幼少期に頻繁な交流を経験した子どもは高齢者をよりポジティブに捉える傾向があり，イメージが肯定的であるほど高齢者との交流活動に対する積極的な取り組み意欲が高いことが明らかとなった。

子どもにとってポジティブな高齢者イメージをもつということは，どのように生きるかという目標や，希望をもって将来を描けるということにつながっていく。自分の存在を見守り，喜びをもって受け入れてくれる存在や，自分が誰か他の人の役に立つことができるという有用感を得て，自己肯定感を育むことができるかを“交流の質”としてどのように評価していくかは今後の課題である。

また，学校教育における世代間交流活動には特に次の点を重視してプログラム化することが必要で

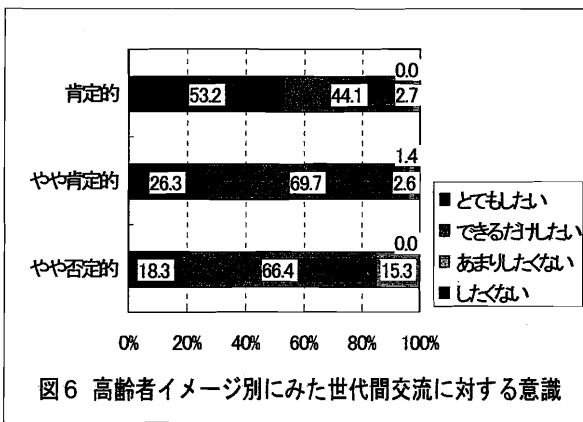


図6 高齢者イメージ別にみた世代間交流に対する意識



ある。

- ① 子どもと高齢者との交流が継続できるためのシステムを確立する。
- ② 子どもたち一人ひとりが、より意識的、積極的な交流ができるような活動内容や交流方法を工夫する。
- ③ 交流する世代のそれぞれにコーディネーターを配置する。
- ④ 活動主体たる子どもや高齢者だけでなく、福祉施設や学校の教職員も交流する世代を理解するための機会を設け、交流活動の目的や交流する相手への対応を共有化する。

この地域における保育園・小学校・中学校の世代間交流活動が継続している要因のひとつに、福祉総合施設の存在がある。1日30分という僅かな時間であったとしても園児と高齢者の毎日の交流が実現している背景には、幼老複合型施設という建築要件が寄与している。移動の時間や安全面、職員の打ち合わせ等の連携が図りやすいというメリットは大きい。ここで綿密に計画された日常的な交流は、その頻度と物理的な距離により自然な交流を生み出し、交流活動の主体を次第に子ども自身へと移行させている。子どもの成長・発達に応じて交流活動そのものも発展していく様子が感じられる。小学校や中学校でもこの点を踏まえて、通常の教育カリキュラムや特定の教員に負担が集中することのない、無理のない交流活動が可能となっている。

同様の交流や効果は、建物を併設・合築すれば直ちに得られるものではない。しかし複合型の施設が、限られた時間内に交流活動を実施するためには、極めて大きな利点であることは否定できない。にもかかわらず、複合施設であっても実際にはほとんど交流活動が行われていないケースもあり、合築・併設されていない施設の場合にはさらに顕著である。世代間交流に対して熱意のある教職員の存在や役割も重要であるが、通常の業務や異動等により活動が断ち切られることもある。今後は活動主体間の格差や担当者の負担が大きく、情報提供や研修の機会が不十分といった現在の状況を早急に改善していかなければならない。特に世代間交流コーディネーターの専門職を養成し、福祉施設や学校教育、あるいは行政職として位置づけていくことは喫緊の課題である。

学校教育において“価値ある体験”となるための世代間交流活動とはどのようなものであろうか。世代間交流活動は全ての世代を対象に、目的や内容、方法によって多様に展開することが可能である。

図7に子どもや青年ら若年世代と中年・高齢者世代との交流に視点を定め、関係性と活動を支えるシステムを示した。どちらの世代も各々が有する資源を異なる世代に対して活用することができる。子どもや青年にとっては家族や学校に限定された人間関係を拡大させ、自己肯定感を高めるとともに、生き方を見出すという効果が期待できる。中年や高齢者にとっても社会的孤立を防ぎ、生きがいを得るとともに身体的にも要介護予防にも寄与することができる。さらに世代間交流は、全ての世代の人々の生涯にわたる人間発達を促進し、生活の質を高め、コミュニティを再生し、地域が抱える様々な社会問題に対応することができるのである。

子どもは身近な大人や高齢者との交流により、「年を重ねることはどのようなことであるのか」「人生とは何か」等について学ぶ。それは知識を体系的に得るというより感覚的に理解する学びである。

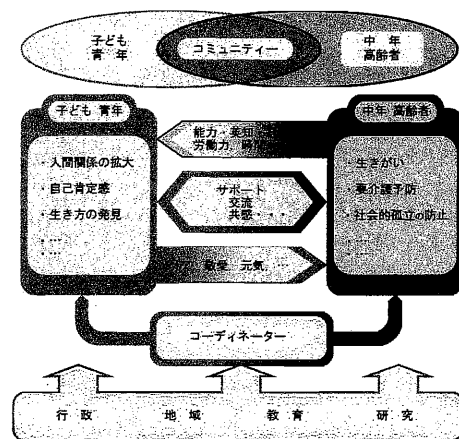


図7 若年・中高年世代の世代間交流の概念図

「いかに生きるべきか」を模索する若年世代にとっては指標となるだけでなく、自分自身を見出し、見極め、創造する基盤となり得ること、すなわちライフマネジメントスキルの向上に寄与することが重要であると考え。公衆衛生や高度医療の進展によって健康を維持できるようになった現代社会では、高齢者を一律に受動的な弱者として位置づけることは妥当ではない。「子どもと高齢者との交流」では、相手との関係が親族か親族以外か、相手の健康状態がケアを必要とするかそうでないか、交流の場が家庭内か家庭外か、家庭外では主に子どもが過ごしている場、主に高齢者が過ごしている場、どちらにも区分されない場に分類できる。本研究で園児・児童・生徒と交流した高齢者は、福祉施設を利用しているケアの必要な相手で、交流の場は基本的に高齢者が過ごしている場であったが、今後はケアの必要な高齢者ばかりではなく、前述した学校支援ボランティアを活用した元気高齢者との交流についても発達段階を踏まえてプログラム化していく必要がある。児童・生徒にとって“価値ある体験”となるための世代間交流プログラムとは、交流活動が行われているその時点にとどまるものではない。活動そのものの継続や発展とは別に、幼少期・学齢期の交流が個々人の将来にわたって継続・発展していくことを考慮しなければならない。体験や活動を実践することそのものを目的とした取り組みばかりではなく、世代間交流活動によるエイジング学習を導入した教科教育カリキュラムを検討することも有効であろう。

最後になりましたが、本研究にご協力いただきました福祉総合施設、小学校、中学校の皆様には厚く御礼申し上げます。

#### 引用参考文献

- 1) 総務省統計局, 人口推計月報, <http://www.stat.go.jp/data/jinsui/tsuki/index.htm> より。
- 2) 総務庁長官官房高齢社会対策室, 児童・生徒の高齢化問題に関する意識調査結果 (1999)
- 3) 中野いく子・中谷陽明・冷水豊・馬場純子, 小学生の老人観について, (財)長寿社会開発センター, 世代間交流による高齢者の社会参加促進に関する基礎研究—論文・資料集, 347-366 (1995)
- 4) 馬場純子・中野いく子・冷水豊・中谷陽明, 中学生の老人観について, (財)長寿社会開発センター, 世代間交流による高齢者の社会参加促進に関する基礎研究—論文・資料集, 367-388 (1995)
- 5) 増山均, <子ども・高齢者>問題と世代間交流の動向, 早稲田大学大学院文学研究科編, 早稲田大学大学院文学研究科紀要, 第1分冊, 49, 81-94 (2003年度)
- 6) Kaplan, M., Intergenerational Programs in Schools: Considerations of Form and Function. *International Review of Education*, 48(5), 305-334 (2000) に詳細。M. Kaplan: 世代間プログラム—「どの程度深く関与するか」の問題, 間野百子訳, 草野篤子・秋山博介編, 現代のエスプリ 444号—インタージェネレーション—, 至文堂, 51-58 (2004)
- 7) 広井良典, 人間の3世代モデル—新しい高齢化社会のビジョンのために—, 超高齢社会における世代間ケアシステムのあり方についての調査研究—「老人と子ども」の3世代モデルの視点から—, 国際長寿センター, 1-26 (1999)
- 8) 厚生労働省, 平成15年 社会福祉施設等調査結果の概要, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/fukushi/03/index.htm> より。  
なお, 平成16年の同調査結果には併設の状況が記載されていない。
- 9) 多湖光宗監修, 幼老統合ケア研究会編, 少子高齢化も安心! 幼老統合ケア“高齢者福祉”と“子育て”をつなぐケアの実践と相乗効果, 黎明書房 (2006)
- 10) 山崎美佐子・角間陽子・草野篤子, 異世代間におけるネットワークの可能性—祖父母と孫の交流関係から—, 信州大学教育学部紀要第112号 (2004)
- 11) 長野県鬼無里村福祉総合施設リーフレット